

アメリカ・プリンストン大学訪問報告

日高昭二

訪問先：Princeton University

Department of East Asian Studies

訪問日時：2006年9月1日

訪問者：鈴木 彰・日高昭二・村井まや子・山口ヨシ子

Department of East Asian Studies の Atsuko Ueda 教授のご尽力により、プリンストン大学を訪問する機会を得た。約束の正午すぎに駅に到着すると、Ueda 教授の graduate student in Japanese literature だという Yong-ah Chung さんご夫妻が出迎えてくださり、まずはキャンパスを案内してくださった。ゆるやかな勾配と整然とした並木からなるじつに美しいキャンパスで、歴史を感じさせるイギリス風の建物が緑のなかにほどよく配置されている。その中のひとつが学生寮であると聞かされて、そのあまりの豪華さに驚くばかりであった。

周知のように、米国東部のニュージャージー州プリンストンにあるプリンストン大学は、学生の教育と最先端研究とを両立させている数少ない大学である。そのなかでも、学部教育の最優先 (teaching is top priority) を基本的な方針に掲げるユニークな大学としてもよく知られている。そうした学部教育を特徴づける制度としては、Preceptorial system (講義内容の補完を目的とした少人数グループ討議の制度) や、Honor system (すべての筆記試験は学生の正直さを前提に教員による試験監督なしで実施する制度) などがあり、さらに卒業論文重点主義などがあるという。

そうした特徴を、さらにカリキュラムに沿って具体的にいえば、「一年生セミナー」と「履修科目分散規定」が挙げられる。前者は、60種類のテーマで実施されるセミナーがすべて15名以下の人数制限で行われること、また後者は、早すぎる専門化を回避するために、主要な学問分野を幅広く与えるという制度で、さらに「論文執筆プログラム」では、一年生全員に対して一学期間の履修を義務づけているという。

アメリカにおける多くの大学が、大学院における研究を標榜するなかにあって、学部教育の優先が確実に運用されていることは、プリンストン大学の大きな特徴といわれ、そして教員もまた学部教育に強いコミットメントをしており、それがまた教員相互のプレッシャーになっているともいうのである。^{注)}

訪問の直前、ニューヨークの宿舎でみた日系新聞は、News Week 誌が毎年行っている大学総合ランキング (入学者の学力水準、教員スタッフの充実度、学生対教員の比率、財務基盤の充実度合、卒業生による大学への寄付の多寡などの指標による) で、2006年度もまた全米一位になったことを速報していた。

そのことを、最初にお目にかかった Martin Collcutt 教授 (専門は、Japanese History で、『Five Mountain = 五山』の大著がある) に伝えると、氏はその要因が学生に対する手厚い奨学金の制度にあることを教えてくださった。奨学金の配分については、学部から独立した委員会が設置され、たとえば将来東アジアを研究の対象 (法律や経済についても同じ) に予定している学生に対しては、その東アジア言語 (中国語・韓国語・日本語) の習得姿勢や運用能力を判断し、その結果を委員会に推薦するのだ

という。そして、すべての奨学金のうち、約7割が返還義務のないものだという。

次に Seichi Makino 教授（専門は、Japanese Pedagogy, Director of the Japanese Language Program）にお目にかかって、主として日本語の履修状況についてうかがった。

まず院生は5～6人程度おり、そのうち中国人が5人、日本人が1～2人という割合だという。また学部における語学履修については、近年中国語を履修する学生が増加しているが、日本語もおよそ100人前後（内訳は、英米系が6割、残りが中国系と韓国系で日本人はいない由）で、このところ安定した履修者数であるという。履修の理由としては、従来は日本経済の好調さを反映して外資系企業への就職という理由があったが、最近ではアニメや建築についての関心など、その理由も多様化しているといわれる。

また、日本語教育のカリキュラムのなかで、最大の特色というべきは、100人の履修者のうち、毎年45人を選抜して、金沢市に語学研修に参加させていることだという。この45人の選抜に合格すると、往復の旅費が大学から支給され、また宿舎も金沢市内でのホームステイになるという好条件もあって、学生はこの枠に入るべく必死に勉強するのだという。このシステムは、金沢市の協力によって、「Princeton in 石川」という8週間のプログラムとして提供されているという。

さらに氏は、コロンビア大学の修士課程における日本語夏季講座にも出講なさっておられ、1回2週間の講義を3回に分けて行うプログラムを設定・運営しているというが、このほうはオーストラリアとニュージーランドの学生が圧倒的に多いと話された。そして、これらの国では、日本語教員の需要が増えているともいわれた。

最後は、図書館司書の Yasuko Makino さんに、東アジア研究所図書館を案内していただいた。東洋風のインテリアで装われた部屋の新刊書や雑誌、および参考図書からして、すでに充実した収書ぶりが目立つが、学生が目の高さまで積み上げた資料と格闘している様子が印象的であった。収書の方針をうかがったところ、米国東部の大学間による「分担収書」を心がけているとのことで、そのうちプリンストン大学の分担としては、日本の「地方史」関連の図書の収集に重点をおいているという。なるほど、県別はおろか町村ごとに至るまでの地方史の書物がずらりと並んでいて圧巻であった。

ライブラリアンとして最優先の仕事は、何よりも「学生の要望に応えることです」とおっしゃる Makino さんは、学生が欲しいと思う資料をすみやかに提示できること、また他から調達できる態勢をつくっておくことをつねに念頭においています、と答えられた。

こうして、今回の訪問は、多くのスタッフのチームワークによる日本および東アジアの教育と研究が、じつに充実したシステムともども運営されていることを、直接肌に触れて実感する機会となった。そのことを強く実感するにつれ、彼らプリンストンのすぐれたスタッフたちと交通するネットワークを、一日も早く構築する必要性を考えずにはいられない。

注) 慶応義塾大学総合政策学部教授・岡部光明氏「米国プリンストン大学における学部教育について—その理念・制度的特徴・SFCへの示唆—」（2005年4月）参照